

同志社大学脳科学研究科外部評価結果報告書

2017年 12月 1日

1. 研究科・専攻の評価

a) 研究科の教育研究及び運営体制

【所見】(約1,000字)

同志社大学大学院脳科学研究科は、脳科学分野の優れた研究者による先端研究と次世代の研究者養成を目的とした5年一貫制大学院である。実質的に脳科学研究を推進するわが国唯一の研究科であり、その研究成果と研究者育成には学术界、産業界からの期待が寄せられている。実際、いくつかの部門において、世界のトップレベルの研究が展開されており、期待に沿うものとなっている。

① 教育課程に相応しい教員組織を編成しているか。

大学院生に対する教員比率が高く、きめの細かい少人数教育を可能にしている。また、いずれも一流の研究者で設置科目を担当するに相応しい人材である。一方、各部門に配置されている特定任用研究員については教育・研究に果たす役割の重要性のみならず、優秀な人材確保という点からも現行の雇用期間は短すぎるため、対策を講じる必要がある。

② 教員組織の編成に必要な基準を整備して適切な人事を行っているか。

選考手続は、他大学と比較してもほぼ同様で妥当といえる。ただ、研究科教員だけの少数で人事が進められることになるため、何らかのかたちで中立の立場にある外部の有識者の意見を取り入れる仕組みを検討すべきである。

③ 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成・実施しているか。

授業科目は充実した内容で、「研究安全と倫理」「脳科学研究戦略」の科目設置も評価できる。入学者の出身学部が多岐にわたることから、今後、必修科目の範囲を拡げる等、何らかの対応が必要かもしれない。

④ 人材養成目的の達成に向けて、研究科の特徴的な教育方法が機能しているか。

ラボローテーション(科目「脳科学実験1・2」)、および早期の達成度を評価するQEは研究科の特色といえる。特にQEについては、教員の多くの時間と努力によって行われている点、さらに制度が改善された点が高く評価できる。また、リトリートの実施も研究科の活性化に寄与していると評価できる。

⑤ 教育研究力を高める活動を展開するとともに、研究科の質的向上を図る組織的運営を行っているか。

FD委員会、自己点検評価委員会を設置、定期的開催されており、研究科としての活発な取組みは評価できる。

b) 定員充足の状況

【所見】(約500字)

① 研究科の人材養成目的を果たすために、アドミッション・ポリシーに基づいた学生を獲得できているか。

開設当初の定員の充足率は50%に満たない状況であったが、京田辺キャンパス移転後は80%強となっており、一定の努力があったことについては評価できる。ただし、出願・受験者数は10名前後にとどまっており、脳科学研究に必要な知識、能力をもつ学生を獲得できているのか不安は残る。全国的な博士課程の学生数の減少等を考えれば、やむを得ない面はあるものの、同志社大学以外の学生、留学生、社会人経験者等幅広い人材の確保に向けて一層の努力が望まれる。志願者獲得には、修了生の研究職や企業への就職等での実績が、研究科の評価を高め、優秀な志願者の増加につながるものになると考えられ、その情報を発信する研究科のホームページの改良が望まれる。

なお、リサーチインターン制度も評価するが、あくまで研究に支障がでない範囲にとどめるよう留意は必要である。

c) 国際的な学術交流の状況

【所見】(約500字)

① 国際的に高く評価される実力を備えた研究者、世界に通用する高度な技術と広い視野を身に付けた専門技術者を養成するために、国外の大学や研究機関等と学術交流を展開しているか。

同志社大学全体では多くの世界の主要大学と交流協定が結ばれているが、脳科学研究科については限られており、さらにその交流も一部の教員、学生に偏ったものになっている。優れた若手研究者育成のために、学生および若手研究者の海外派遣を積極的に行う努力が必要である。一方、学内で国際学会を開催している点については、学生が啓発されるよい機会でもあり評価できる。今後、さらにこの機会が増えることが望ましい。

外国人留学生については、平均すれば年1名の受入実績があるが、さらに獲得をめざしてもらいたい。

脳科学研究科全体として、国際的な学術交流については一定の評価はできるが、将来を見据え、今後なお一層の国際交流の推進を図るべきである。

d) 研究活動における倫理審査及び環境対策の状況

【所見】(約700字)

① 各部門で研究活動を進めるにあたり、研究内容に応じて、必要な手続きや申請を行っているか。または倫理審査を受けているか。

研究活動に対して、必要な倫理審査、環境保全関係の手続きが行われており、特に問題はない。

e) 学内資金の投入及び外部資金の獲得状況

【所見】(約500字)

① 研究科の経常経費として、どの程度の学内資金を要しているか。

必要以上の学内資金の投入はなく、適切に運用されている。脳科学研究科特別奨学金は、学生への経済支援として重要な役割を果たしており必要と認められる。

② 研究科設置時の目標どおり、経常的な研究経費を外部資金で賄うことができているか。

専任教員すべてが戦略的創造研究推進事業、研究拠点形成事業、戦略的情報通信研究開発推進事業等の大型資金をはじめとする何らかの外部資金を獲得しており、しかもほとんどが複数獲得している点は高く評価できる。また、特定任用研究員の多くが競争的資金を研究代表者として獲得していることは、研究科教員の研究能力が高く評価されている証左といえよう。

部門(教員)間で獲得研究費に差があり、十分な資金の獲得ができていない部門も見られるものの、平均的には科学研究費を中心として、財団等の助成等、順調に外部資金を獲得できていると評価できる。

なお、今後は、大学からの支援を得て、産学連携、寄付金等、競争的資金以外の資金を導入することも検討いただきたい。

f) 情報の公表及び研究成果の発信状況

【所見】(約500字)

① 研究科のホームページや各種広報媒体は、情報の非対象性に配慮した、志願者をはじめとする社会一般に伝わり易い構成であり、公表すべき教育や研究に係る基本情報が網羅できているか。

ホームページは、シンプルなデザインで、必要な情報は網羅され、情報発信の機能は一応果たしているとはいえるが、魅力的とはいえない。中間評価時より改善したとのことだが、まだ十分とはいえない。

志願者に対しては、部門の内容紹介が短く、入学を検討する学生に対して、十分な情報とはいえないのではないかとされる。他方、社会一般に対しては、内容は専門的で難解である感があり、研究科の知名度をあげるためには、一般にもわかりやすい情報を発信する工夫が必要と考えられる。

伝え方では動画を用いる等の手法を用いたり、デザイン面・運用面では業者委託するのも1つであろう。

パンフレットは、構成・文章とも平易な構成で標準的なものといえるが、研究科のユニークな点、独自の取組み等のアピールがあってもよい。

なお、画期的な研究成果については、ホームページにとどまらず、マスコミ等を通じて積極的に発信していくべきである。基礎研究分野で難しい部分もあるが努力を続けてもらいたい。

g) 前回の外部評価結果を踏まえた取組状況

【所見】(約500字)

① 前回の外部評価時の指摘事項にどのように対応したか。

上記a～fの各項記載のとおり、まだ課題があり、改善の余地は残るものの、前回の評価での指摘事項に対し、研究科として真摯に取り組み、概ね改善はされていると評価できる。ただし、特定任用研究員の雇用期間が短すぎるという問題については、ほとんど進展が見られないのは残念である。大学全体として、取り組む事項であり、今後も解決に向けて継続的な努力が望まれる。なお、前回指摘したが、教育研究活動において、研究が停滞していると感じられる部門もあり、依然として部門間に差が生じていることは、懸念される。それらの部門には、今後の奮起を促したい。

外部評価全体としては、内規に定められている各項目の評価基準、総合評価基準の見直しを求めたい。つまり、各評価項目の評定をもとに、SからDの総合評価に置き換えるが、対応関係に疑問が残り、評価が正確に反映されているとはいえず、次回評価までに対応が望まれる。